一人ならじ

原作・山本周五郎

出演者

東堂初穂（お弓）

栃木大助

大助「あなたは我が家の奉公人 源八 の姪と聞きましたが……」

お弓「はい、お弓と申します。栃木家の下働きとして仕えたく、参りました」

大助「大助です……最近、身近な者に去られて何かと不自由な思いをしていたので、助かります」

お弓「大助様のお噂は以前より伺っております」

大助、少し不快な顔をする。

大助「……噂といいますと」

お弓「はい、栃木大助様は幼少の頃より我慢強く、『痛い』ということを言わない。たまに何か具合が悪いことがあっても、『困った』とか、『参った』などと泣き言一つ決して口に出さないとあなた様のお父上権六郎様が甲斐武田家の馬場信勝様にそうご披露なされたとか、そのことを聞いた信勝様のご家来衆が『戦国の世の武士たる者が泣き言を口にしないなどとは当然のこと、その当然なことを取得として披露するにはそれだけの理由があるに違いないと、ある時数人であなた様を息もつけぬ程に捻じ伏せ、『どうじゃ大助苦しかろう！』と力任せに首を絞めあげると、あなた様はやがて潰れたようなお声で、『死ぬよりいい』とおっしゃったとか……それがご城下の噂となり、一度あなた様のお顔を拝見したいと武家、町人の娘たちがこの栃木家のご門前に溢れ返った』とか……そのようなお方の下で働くことが出来れば、どれほど果報かと」

大助、お弓の話を黙って聞いていたがやがて静かな声で、

「お聞きしたい」

お弓、大助の眼に不快なものを感じ一瞬息を飲む。

大助「あなたは源八の姪だと言いうが……」

お弓「はい」

大助「……それは嘘でしょう」

お弓、驚く。

大助「あなたは、東堂家の初穂どのだ、そうですね」

初穂は蒼くなり唇がふるえ、何も言えない。

大助「……あなたとの婚約は破談になった。ここへ来られた気持ちはおよそ察しがつくし、ありがたいと思うが、武家の作法としてゆるされることではない。お志だけはお受けしますが帰ってください」

初穂「いいえ……」

大助「いいえとは……帰らぬということですか」

初穂「わたくし父に義絶をされてまいりました」

大助「……東堂殿から縁を切られたと」

初穂「はい、ですから、この家のほかにまいるところは、ございません」

大助「……」

初穂「貴方が箕輪の戦いで片足をおなくしあそばしましたことは、いろいろ世間の噂で伺いました。崩れかけた橋を支えるために、御御足を犠牲になされたとか、そのとき傍らに格好の木がございましたそうで、それを楔にかえば足を失わずとも済んだ、ふたしなみ（普段の心がけが足りない）だという噂にございます。わたくしはそれを聞くたびに、あんまり口惜しくて幾たび泣いたか知れませぬ」

初穂はせきあげてくるものを抑えるように、唇を噛んでぐっと喉を詰まらせるが、再び面をあげ、忿りと訴えを籠めた口調で、続ける。

「……他人の事はどのようにも申せます。また事の済んだあとなら幾らも手立ての思案はつきます。合戦のまっ唯中で、しかも呼吸の間ものがせぬ必至の場合、こうかああかの思案が出来ましょうか、貴方が片足をおなくしなすったのは、そうしなければならなかったのだとわたくしは存じます。貴方の機転で橋は崩れず味方の隊が怒涛のごとく渡って行くことが出来た。その時、大助様の御御足がめりめりと砕けたという……父が婚約を破談にしましたのは、貴方が再び戦場へ出られぬ身体になったからだと申しましたが、まことは世間の蜚語（無責任な評判）を気にしているのでございます。そうでなくてなぜ破談にいたしましょう。討死にして、すでに世に亡き良人にさえ妻は思いを寄せるものです。わたくしは一年前から栃木家の嫁でございます」

大助「……初穂どの……味方は勝ちましたか負けましたか？」

初穂「……お味方の勝利だと存じますが」

大助「そうです、味方が勝ったのです、それが全部です。もののふ（武士）はみな進んで死地に飛び込む……そして人は噂をするでしょう。戦いぶるが良かったとか悪かったとか評判は必ず起こるものです。わたくし一人ではない、なかには評判にもならず、その名はもとより骨も残さず死ぬものさえある……どうか家にお帰りなさい……一年前から栃木家の嫁だと言う、その言葉が本当なら帰って下さい、いや帰らねばいけない、なぜなら」

大助は身をひねり、長さ三尺ばかりの太い杖のようなものを初穂に見せ、

「これが何だかわかりますか」

初穂「……」

大助「足です」

初穂「？」

大助「片足の不自由な者でも、うまく継足が出来れば歩ける。現にお身内にも山本勘助という人がいる。二年かかるか三年かかるかわからないが……いつか、あなたを迎えに行きます……必ず」

初穂「……わたくし……戻ります」

完

2021.12.01.wed